泌尿紀要12巻3号
昭和41年3月

泌尿器科紀要
第12巻 第3号
昭和41年3月

随想

温故知新

東邦大学教授 安藤 弘

昨年8月20日付を以って，東邦大学泌尿器科教室の教授を任命され，同教室を主宰することになりました．10月より赴任して，教育 診療に従事し，細々ながらも少人数の教室員と研究を始めて居りますが，新設教室とは名ばかりで，半歳を経た今日でも，医局の分離も出来ず，研究室の整備も進捗せず，教室作りも一向に捗らない現況であります．就任に当っては，全国の先輩諸教授を始め，多くの人々から激励と，懇切なる祝辞を頂戴し，非常な感激を覚え，責任の重大さを痛感致した次第でありますが，紙上を借りて，全国の諸先生方に，重ねて今後の御指導と御鞭韃を御願い致します

今般，稲田教授より，泌尿器科紀要の冠頭言に，何か随想を書く様との御すすめが御座いましたので，就任早々の事ではあり，温故知新の例に倣い，東邦大学の創立の歴史と，皮膚科泌尿器科教室の歴史に就いて述べ，その責を果し度いと存じます．

学祖額田豊・晋先生兄弟によって，財団法人帝国女子医学専門学校(現東邦大学の前身)が東京府荏原郡大森町に設立されたのは，今を去る40年，大正14年(1925年)3月の事でありました．額田兄弟は，岡山県長船町の産で，家は代々医を業とし，仁術を以て知られ，徳望厚く，善根を積まれた額田家の長男及び次男として，夫々，明治11年 19年に生を稟けました．父篤太氏は明治11年東京帝国大学医科大学（当時は斯様に呼んで居た．）に入学したと云う我が国西洋医術の草分けであり，母宇多女の深い愛情に育まれて成人し，明治の晩年（明治38年と同45年）に旧東京帝国大学医学部を優秀な成績で卒業されました．兄豊氏は卒業後青山内科に籍を置きましたが，間もなく独逸に留学し，彼の地に於て，有名なレーマン博士やミュレル博士などの指導を得て，在独2年半にして，帰朝，青山内科に於いて，引続き研究を重ねて居られましたが，在独時代に懐いて居た夢—医学校の創立—を実現するために，青山教授の学問への奨めをも振切って，資金獲得のために開業医の世界に飛び込んだと云うことです

額田兄弟が如何なる動機を以て，如何なる夢と理想を以て，学園の創立を思い立たれたのでありましようか．之を知る事は，唯に学園関係者にとって，重要なる事であるのみならず，教育に携わる者にとって興味ある事でありましよう．

先述の如く，豊氏の学園創設の夢は，ドイツ留学中に芽生えたと伝えられます．大学卒業後間もなくドイツに赴いた彼は，ドイツ人の考え方や生活態度から当時の日本人に欠けて居た，合理的・科学的な考え方と生活態度を感得して，深い驚きと感銘を受けました．そして後進国日本の為に，特に家庭生活の鍵を握る婦人を対象として，医学に基礎をおいた科学教育を与え，保健衛生の向上を図ろうと考えました．そして，更に1つには，東大に入学後間もなく，父篤太氏の急逝後，よく子弟の教育に当られた母，宇多女の深い恩愛に酬るため，女子の教育を通じて，孝養の誠を具現することを念願とされたと云われます．

この大望を実施すべく，大正2年2月には額田病院を開設し，大正9年には鎌倉に額田保養院を立て，大いに隆盛を極め，自己資本を蓄積する一方，次第に銀行の信用を得て，

金融の途もついたので，将来の拡張を見越して，広大で，発展性のある土地をと考え，現在の大森の地を選んだと云われます．当時，大森の地は，「鶴渡り」の名を以て呼ばれ，沼沢が多く，人家も所々に散在する程度で，実に物寂びた土地であったと云います．予定の土地を買収した後は，監督主務官庁である文部省の認可を得ることでありましたが，丁度医学専門学校を全部大学に昇格した直後でありましたため，今後，官公私を問わず，医学系統の専門学校を作る考えは全くなく，ましてや女医の学校など，及びもつかないと云う状態でありました．併し，数次に亘る折衝と熱誠溢るる説得に依って，認可を得，大正14年女子医学専門学校の設立の運びとなりました．教授陣にも当時の医学界の権威者，林春雄，石原忍，西成甫，橋田邦彦，田村憲造，亀高徳平博士らが名を列ね（何れも兼任），国文学の佐々木信綱，倫理の下田次郎博士，家政学の高良富女史等を招聘し，学校の品位と，学生の自尊心を養うことに努めたと云います．斯くして4月18日に153名の入学式を挙行し，昭和5年3月，第1回卒業式が行なわれた際は，全員資格指定国家試験に合格したとの事であります．

その後昭和元年には薬学科，同8年には理学科も併置され，女子に対する科学教育を施す特殊学校として発展しましたが，軈て，戦後，昭和22年には，総合大学東邦大学と改名され，附属の二高校，二中学をも増設して，今日に到って居ります．弟の晋先生は，先年病を得て逝去されましたが，創立者豊先生は，現在，後進に道を譲って，顧問の閑職に就き，88才の高令にも拘らず，尚お壮者を凌ぐ元気さで，身心ともに健在であります．

創立40年にして，今日の隆昌をみますのは，実に豊先生の卓抜な経営方針と，弟晋先生の努力と熱心な教育に依るもので，両者の緊密な協力に依る拮据経営の結実ではありますが，教育の場合は，云わば，天下の公器であり，苟しくも私有物視することは許さるべきではなく，人は変り，世は移り，創立者の時代から，後継者の時代へと転換しつつあり，学園関係者は，大同団結して，東邦大学の発展のため，努力して居ります．

東邦大学の皮膚科・泌尿器科教室の歴史は，実質的には，現皮膚科教授石津俊先生に依って創められました．昭和10年4月の事であります．古い文書に依れば，賀川哲夫・宮村一利教授の名が発見出来ます．この間の事情に就いては，20巻2号の臨床皮膚泌尿器科の“思いつくまま”欄に記しましたが，独立した教室があった訳でもなく，御座なりな講義が行なわれて居たに過ぎなかったと云う事です．

大いなる抱負と，向学の精神に燃え，30才を僅に出た許りの少壮教授として就任された石津教授も，女医だけの教室のスタッフには，随分困惑された様であります．古い記録を見ても，助手とし採用しても，長くて2年，短い人は半歳にも満たず退職して居る状況で，僅に信岡・高橋両講師が数年在籍して研究されて居る様であります．石津先生のお話に依れば学校当局は，女子の学校である事を理由に，男のスタッフを使うことを承認せず，その上，私立医専のこととて，給与は云うを憚る程に低く，何人も一顧だにしない状態であった由で，特に泌尿器科方面では，大手術の場合は非常な不便を感ぜられ，同僚の土屋文雄先生初め，多くの人々の助力を仰がれたとの事であります．戦後昭和24年初めて藤沢弘助教授の就任が認められた様な状態で，先生の教授としての生活は，誠に多忙な，苦労多き毎日で，診療と教育に大部分の時間を費され，研究には，非常な苦心をされたとの事であります．

戦争が始り，疎開が行なわれ，爆撃で御住居と研究資料，書籍は完全に灰燼に帰し，戦後副院長・院長として復興事業，労働争議に対処し，苦難に次ぐ苦難の途を歩まれて来たと云われる．然しながら，勤勉篤実，利欲に活淡而も風物絵画を愛し，特に骨董を愛する先生は少しも屈する事なく，これらの難関を突破され，還暦の祝いを2―3年前に過ごされた昨今ではあるが，今尚お自ら先頭に立って，後進の指導に当り，研究に従事されて居る姿は，誠に貴重であり，且つ敬服に値するのであります．

泌尿器科教室が分離して，先生の御負担も多少軽減された訳で，今後先生が，更に元気に，楽しく，皮膚科学に専念されることを冀うものであります．先生の御期待に副い，東邦大学泌尿器科教室を立派に育成発展せしめなければならない私の使命は重且つ大で，今後長く，荊棘の道が続く事でありましようが，中途で挫折する事なく，踏破しなければならない道であると考えて居ります．